

じんぐう じ または はちまんしんおよび

神宮寺又八幡神及

はちまんだい ぼさつしよせつ そ

八幡大菩薩者説疏

これは事実を叙べた文である。事実と言っても、過去を直接観察することができないので、文献等で知り得る限りの事実である。つまり実際とは異なる推定である場合もあり得るし、それなくしては語れないのだし、推定ではあっても、確認できる範囲内でもかくもそうなのだから、まあ、知り得る限りの事実と言ってもいい、ただ最終的な確定としてよい事実ではなく、すなわち真実とはいえないということである。つまりそれが言いたくて書いた文なので、実はもう、この後は読まなくてもよいのかもしれないが、まあ、見ておくことが最も正しい事実の確認方法なので見ておいてはいかがであらうか。

ॐ
स्वाहा



般若波羅蜜多心經 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦
厄 舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識 亦復如是 舍
利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不增不減 是故空中無色 無受想行識
受想行識 無眼耳鼻舌無身意 無色聲香味觸法 無眼界 乃至無意識界 無無
明 亦無無明盡 乃至無老死 亦無老死盡 無苦集滅道 無智亦無得 以無所得故
菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙 無罣礙故 無有無有恐怖 遠離顛倒夢
想 究竟涅槃 三世諸佛 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提 故知般若
波羅蜜多 是大神咒 是大明咒 是無上咒 是無等等咒 能除一切苦 真實不
虛 故說般若波羅蜜多咒 即說咒曰 咒曰 揭諦揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦 菩提
薩婆訶



ॐ
स्वाहा

京都府八幡市にある石清水八幡宮（いわしみずはちまんどう）は古くは男山八幡宮と言われた。京都南西の男山上に鎮座す。二所宗廟の一社であり、伊勢神宮や奈良の春日大社（又は賀茂神社―上賀茂神社及び下鴨神社―を挙げる場合もあり）とならぶ日本三社のうちの一。又、宇佐神宮、鎌倉の鶴岡八幡宮とともに三天八幡宮のうちの一である。

「弓矢八幡」として武士に崇敬される。八幡大菩薩とも呼ばれた。なお源義家は石清水八幡宮で元服したところから自らを「八幡太郎義家」と称した。

石清水八幡宮は神仏習合にて神宮寺と呼ばれる。

その由緒は、貞観元年（八五九年）に南都大安寺の僧行教（空海の弟子）が八幡宮総本社たる宇佐神宮にて「われ都近き男山の峯に移座して国家を鎮護せん」と神託を授かったことを受け、翌年、清和天皇が社殿を建立し、宇佐神宮から勧請されたことに始まる。社名の「石清水」は男山に鎮座していた石清水山寺（現在は石清水社）によるという。

創建時から境内の護国寺と一体になる宮寺形式であった。当時は山麓に数多の堂宇があつて壮大この上ないものであつたと言う。そうと聞いて思い出されるは『徒然草』のあの章段であろう。某寺の某という僧が山麓にある建築の壮観を石清水八幡宮と勘違いして山上の本宮を見ずに帰つたというエピソードである。

京の鬼門（北東）を護る延暦寺同様に、裏鬼門（南西）を守護する王城守護の神、王権・水運の神として篤く崇敬された。中世以降は宇佐神宮に代わつて、伊勢神宮とならぶ二所宗廟の一つとされ、特に源氏が武神として篤く信仰し、清和源氏の足利氏や徳川氏、今川氏や武田氏などが氏神とし、弓矢の神、必勝の神とされる。石清水八幡宮から勧請され、源頼義による壺井八幡宮や頼義・頼朝による鶴岡八幡宮など、数多くの八幡宮が各地に建立された。

御祭神は、中御前に、菅田別命（ほんだわけのみこと）。第十五代の天皇であらせられた応神天皇の神霊とされ、それゆえ皇祖神ともされ、『承久記』によれば「日本国の帝位は伊勢天照太神・八幡大菩薩の御計ひ」と記される。天照坐皇大御神に次ぐ皇室の守護神とされていたのである。八幡神は欽明天皇三十二年（五七二年）に初めて宇佐に示顕したとされるが、八幡神を応神天皇とした記述は『古事記』や『日本書紀』『続日本紀』にはない。『東大寺要録』や『住吉大社神代記』に八幡神を応神天皇とする記載があることから、少なくとも奈良時代から平安時代初期に応神天皇が八幡神として崇敬され始めたと思料される。

また『続日本紀』に於いては「ヤハタ」と読まれ、『日本書紀』には「矢幡（ヤハタ）」

神」、「源氏物語」では玉鬘の巻に「やはたの宮」と記される。「幡」は神の依り代としての「旗」で、八幡とは数多くの旗である。応神天皇の母、神功皇后は三韓征伐で対馬に寄った際に祭壇に八つの旗を祀った。又、応神天皇降誕のときには家の上に八つの旗がひらめいたとされる。

八幡神は北九州の豪族国造宇佐氏の氏神だったが、数々の奇端を現して大和朝廷の守護神とされた。

又、八幡神は託宣を能くする神として知られるが、自らに就いて、「古へ吾れは震旦国（中国）の霊神なりしが、今は日域（日本国）鎮守の大神なり」と託宣したという記録が『宇佐託宣集』にある。

又、『豊前国風土記』に、「昔、新羅国の神、自ら度り到来して、此の河原（香春）に住むり」とあり、これに拠らば朝鮮半島を経由したとも考えられる。

しかし新羅は古くは辰韓もしくは秦韓と呼ばれ、新羅人は中国大陆から朝鮮半島南東部に移住してきたという『三国志』の『魏書辰韓伝』や『後漢書』の辰韓伝、『北史』の「新羅伝」を鑑みれば「中国発祥説」を確認する程度の意味しかないとも言える。

西御前に、咩大神（ひめおおかみ、比売神）。すなわち宗像三女神、多岐津姫命（たぎつひめのみこと）・市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと）・多紀理姫命（たぎりひめのみこと）の三柱の神とされ、筑紫の宇佐嶋（宇佐の御許山）に天降られたという。又八幡神以前の古い神であるとも。比売神は八幡神の妃神（又は伯母神・母神？）としての玉依姫命（たまよりひめのみこと）や、応神天皇の皇后である仲津姫命（なかつひめのみこと）等とする説もあるようだ。各地にある八幡宮で祭神の異なるゆえんでもある。なお、近年では比売神は卑弥呼であるという異説もあるらしい。

東御前に息長帯姫命（おきながたらしひめのみこと）、すなわち神功皇后である。

この三柱の大神を総じて「八幡三所大神（八幡大神）」という。

八幡神への崇拜は実に甚深であった。

そもそも源氏の敵である伊勢平氏もこれを重んじ、平正盛による造営や平清盛ら伊勢平氏の臨時祭での演舞が記録されている。江戸時代まで護国寺や極楽寺、弁天堂を始め「男山四十八坊」と呼ばれる宿坊が参道に連なった。幕末までは石清水八幡宮護国寺と称す神仏習合の宮寺で、東寺（教王護国寺）や清水寺、比叡山延暦寺、仁和寺、鹿苑寺（金閣寺）、慈照寺（銀閣寺）、相国寺、大安寺などとともに大いに栄える。

慶応四年（すなわち明治元年）、明治政府の神仏分離により、八幡大菩薩を「八幡大神」と改め、官幣大社に列し、社号を「男山八幡宮」とされるが、一九一八年には「石清水八幡宮」に復す。

以上